

# 慰霊碑について

唐澤 聖夫 陸自70

## 私有地で慰霊碑を発見

さいたま市にある青葉園には、個人が建立した山下奉文大将の碑がある。

私が住む群馬県北西部の中之条町には、支那事変で出征した中隊長が部下の慰霊碑を建てていた。私は半世紀以上、町を離れていたので町のことはコンビニとスーパーくらいしか知らなかったが、これを昨年末に知った。

私はいま、高校の同窓会役員の末席に名を連ねているが、同窓会長の家を訪問したとき、支那事変の戦没者の慰霊碑「日支事変十三勇士忠霊碑」を目にした（左写真）。それには、13名の階級氏名が彫られており、そのうち町内出身者は2名いた。



同窓会長に、町に忠霊塔があるのになぜここに慰霊碑があるのか尋ねてみたところ、会長の父上が復員した昭和

14年に建立したものだとは分かった。父上は、昭和43年の33回忌までは毎年12月12日に僧侶と遺族を招いて供養され、その後は父上が独りで益・正月に供養されていたという。昭和53年に父上が他界され、現在は長男である会長がご先祖の供養と併せて、慰霊碑の供養も行っている。

父上は昭和12年9月に高崎で応召同年10月に新編された歩兵第115聯隊第2大隊第7中隊長として従軍、中隊は11月11日に上海に上陸、南京へ向かう途上2名が戦死、12月7日から12日の南京攻略では11名が戦死した。聯隊は、じ後他方面に転用され、14年8月に高崎に帰還し、軍旗を奉還した。

昭和60年に刊行された『高崎聯隊史』には、日清・日露戦争から大東亜戦争までの高崎聯隊の足跡が記述されているが、大部分は明治17年に高崎で創設された歴戦を誇る歩兵第15聯隊のパラオとペリリュー島の記述で、歩兵第115聯隊に関しては部隊の沿革と行動の概要があるだけだ。

軍隊には、同じ釜のめし、苦楽を共に、生死を共に、中隊長はお父さん、中隊附准尉はお母さん等々、絆や連帯意識を表す言葉がある。

歩兵第115聯隊は、編成から軍旗奉還まで約2年という歴史の短い部隊だった。中隊長の胸中を察すれば、戦

死した13名の部下はやがて忘れ去られるかもしれない。しかし何とかして彼らを後世に伝えたい。そのために私有地に慰霊碑を建て、南京突入の日である12月12日に毎年供養を行ってきたのではないかと思う。

## 中之条町近隣の慰霊碑等の状況

現在、中之条町近隣の2町1村にある慰霊碑等は、次のとおりである。

忠霊塔は11基で戦中に建立されたものは8基、戦後は3基。最古は昭和17年12月、最新は昭和50年4月。西南戦争から大東亜戦争までの戦没者を合祀し、町村ごとに建立され、町村役場または遺族会が管理している。町村合併により2町9村が2町1村になったので、町村の数と忠霊塔の数が一致していない。忠霊塔に刻まれた文字は、多くが東條英機大将・首相の揮毫である。慰霊碑は5基で、神社の境内またはその近傍にある。最古は明治41年、最新は昭和10年。西南の役から支那事変までの戦没者を合祀しており、在郷軍人会または有志の手によって建立されている。揮毫者に福島安正大将、乃木希典大将、東郷平八郎元帥の名がある。その他にパラオ諸島慰霊碑がある。

平成3年にパラオ会が建立した。慰霊祭は、町村ごと、あるいは碑の所在地ごとに実施されている。

編集委員・佐藤 唐澤氏の「慰霊碑について」を拜読し、中隊長と戦死した部下との真情あふれる繋がりに深い感銘を受けました。慰霊碑には、部下を思う深い気持ちが込められています。

日清戦争や日露戦争、大東亜戦争で戦没された方々を偲ぶため、明治から昭和にかけてご遺族や町内会が建てた「民間慰霊碑」は、全国に1万3174基があるとのこと（2014年、厚生労働省の調査）。

しかし、戦後73年を経て戦争の記憶が薄れる中、民間慰霊碑をどのように継承していくのかという問題が各地で重くのしかかってきています。慰霊碑は維持管理しなければいけませんが高齢化や後継者不在でそれが難しくなっています。また、慰霊碑の3分の1近くが、誰が管理しているのか分からない状況になっています。中には風化が進み、倒壊の危険性のあるものもあるようです。

厚生労働省は2016年度に、民間慰霊碑の移設や埋設にかかる経費の半額を補助する制度を創設しました。民間が建立した慰霊碑ですので、自治体が積極的に維持管理に乗り出すのは難しいかもしれませんが、ご遺族や町内会と連携しながら、自治体の慰霊碑等に合祀するなどの方法で、この問題が解決することを願っています。